

平成 22 年 4 月 20 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20730089
 研究課題名（和文） 「公私」観念についての思想史的考察——18世紀スコットランド啓蒙哲学を中心として
 研究課題名（英文） Consideration of the concept of `Public-Private` in History of Thoughts—Focusing on Scottish Enlightenment in Eighteen century.
 研究代表者
 一ノ瀬 佳也（ICHINOSE YOSHIYA）
 千葉大学・大学院人文社会科学部研究科・特任教員
 研究者番号：20422272

研究成果の概要（和文）：本研究においては、スコットランド啓蒙哲学における「公私」観念についての研究を行った。そのために、グラスゴー大学アダム・スミス・リサーチ・ファンデーションの客員研究員となり、このテーマをめぐってグラスゴー大学のクリストファー・ベリー教授と議論した。その結果、「私」的個人とは、単に利己的なだけでなく道徳的心性を有しており、自分たちで正義を導くことができることが分かった。

研究成果の概要（英文）：In this Research Project, I have studied about the concept of `Public-Private` in Scottish Enlightenment. For the purpose, I was Visiting Fellow in Adam Smith Research Foundation and discussed this theme with Prof. Christopher Berry in University of Glasgow. In the result, I could understand that Private Persons weren't only selfish but moral sentiments and brought themselves Justice.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：道徳哲学、市場と国家、公共性

1. 研究開始当初の背景

グローバル化に伴う多文化的な状況において、これまでの国民国家や公共性のあり方が大きく変わり始めている。従来のようなナショナリズムの一元化ではなく、「多様性」や「差異」に開かれた新しい発想

への転換が必要になってきた。それに応じて、「国家」(=公)と「個人」(=私)という二項対立のそもそもの構図を問い直していかなければならない。

現代において、「公」と「私」の観念は、それぞれ別々なものとして認識されること

が多い。近代以降、「公」としての「国家」(＝官)が専門特化され、「私」である個人から切り離されることになったからである。こうして「公-私」の分化が進むにつれて、国家の「規律」と個人の「自由」のどちらを優先するのが争われてきた。

しかし、近年においては、こうした二項の対立には解消できない様々な問題が生じるようになってきている。ドメスティック・バイオレンスや幼児虐待のように、私的な領域に公権力が介入しなければならない状況が産み出されている。反対に、従来は公的なサービスであったものをNGO、NPO、もしくは民間会社が担うというように、それらが「私」の領域に移されることもある。社会の発展とともに、「公私」区分の境界はより流動的なものになり、従来の公私二元論では対応できなくなってきた。ジョン・ワイントライブは、公私の両極分化に対して、中間団体としての「市民社会」の役割の意義を強調した。

中間団体としての社会の関係性を積極的に捉えたのが、スコットランド啓蒙哲学の論者たちである。彼らは、個人を孤立した利己的なものとみなしていなかった。また、私的個人とは切り離された公的国家を構築することもなかった。彼らの理論には、17世紀の社会契約論の設計主義を批判し、「自生的な社会秩序」を提起したところに特徴がある。フランシス・ハチスン、ディビット・ヒューム、アダム・スミスの道徳哲学には、そのための独創的な理論を展開されていた。

本研究は、この道徳哲学の論理を明らかにすることを通じて、公私二元論を超える新たな政治構想をもたらすことを試みるものである。

2. 研究の目的

本研究は、18世紀スコットランド啓蒙哲学の諸理論に焦点を当て、近代商業社会の形成における「公私」観念の発展の意義を捉えることを目的としている。

スコットランド啓蒙哲学の諸理論は、これまで政治思想史の分野においてあまり注目されてこなかったが、17世紀の社会契約論に代わる「自生的な社会秩序」という新しい政治構想を提起するものであったのである。彼らは、個人を他者から遊離した孤立した利己的存在とみなさず、むしろ他者と関わり合う道徳的存在であると論じていた。そのため、「自然状態」においても、「カオス」ではなく、一定の社会秩序が成り立つようになったのである。ここにおいて、社会秩序とは、国家の強制によって成り立つものではなく、人々の「共感」から成り立つ「正義」によって支えられると考えられることになった。こ

のようにして、彼らは、新たに「自生的な社会秩序」を提起したのである。

上記の彼らの理論の特徴を明らかにするために、下記の四点に着目した。1. 古典古代における概念の起源を明らかにする。2. これらの概念の近代自然法学(グロチウス、プーフェンドルフ)への理論的な展開とその意義を示す。3. ジョン・ロックにおける「公私」観念とその「立憲主義」の特徴を明らかにする。4. フランシス・ハチスンとアダム・スミスの「道徳哲学」(Moral Philosophy)の論理から、18世紀における市場の成立と「公私」区分についての理論的な展開を示す。

以上のようにして、本研究においては、スコットランド啓蒙における「道徳哲学」の論理を示し、商業社会の発展における「公私」観念の理論的な特徴を明らかにすることを行った。

3. 研究の方法

本研究は、「公私」観念の歴史的な展開を辿り、その政治的な意義を検討するものである。そのために、まずは「公私」についての概念整理から行なっていく。そもそも「公私」観念は、古典古代に端を発するものであり、その歴史から理解していかなければならない。次に、こうした概念が、近代思想においてどのように適用されることになったのかを調べる。近代においては、古典古代と異なり、「所有権」(Property)の普遍化が行われるようになり、共同体に対する「個」の自律が唱えられるようになる。このテーマは、17世紀の自然法学の伝統にあったグロチウス・プーフェンドルフ、ロックによって論じられた。彼らの理論を検討することを通じて、個人の人格の平等性をいかに理論的に規定したのかを明らかにすることができる。さらに、商業社会が発展すると、フランシス・ハチスンやディビット・ヒューム、アダム・スミスなどのスコットランド啓蒙の理論家たちが現れるようになる。彼らは、格差をもたらす社会の多様性を積極的に捉えた上で、上記のテーマを組み変えていく。その結果、新たに「自生的な社会秩序」を提起し、公的な国家の役割の変化についての論じたのである。

上記の内容を、以下のように研究した。

(1) 平成20年度

初年度においては、まずは「公私」観念についての理論的なフレームワークを確立することを行った。「公私」観念をめぐる研究は、近年国内外において盛んに論じられてきた。特に、日本では、東京大学出版会から『公共哲学』(全20案)のシリーズが刊行され、様々な観点からの議論が紹介された。また、海外においても、ダニエラ・ゴベッチによる

Private and Public : Individuals, households and Body of Politic in Locke and Hutcheson (Routledge, 1992) やジェフ・ワイントライブ等による *Public and Private in thought and Practice -Perspectives on a grand Dichotomy* (The University of Chicago Press, 1997) が刊行され、従来の公私二元論が問い直されるようになっている。これらの先行研究をフォローすることは勿論、ジョン・ロックの思想に注目しながら「公私」観念についての理論的に検討を行った。

「公私」観念についての思想史的検討は、始まったばかりであり、代表者が所属する研究機関にも、十分な文献や資料が揃っていない。そのため、イギリスのスコットランドに渡り、一次文献や資料を集めなければならない。まずはエディンバラ大学とグラスゴー大学を訪問し、それぞれの図書館の「スペシャル・コレクション」にある貴重な資料や文献の収集を行った。

また、代表者が研究分担者となっている基盤研究 (C) 「日米における憲法政治——共和主義的公共哲学を中心として——」(代表者：小林正弥、平成 19 年—20 年度) において、公共哲学の分野において世界的に著名なハーバード大学のマイケル・サンデル (Michael Sandel) 教授を招聘し、国際シンポジウムを行った。それによって、現代アメリカのコミュニタリアニズムにおける「正義」についての理論的構想を理解することができた。

(2) 平成 21 年度

次年度においては、上記の研究成果を踏まえた上で、18 世紀の市場の成立における「公私」観念の理論的な展開について研究した。特に、これまであまり注目されてこなかったスコットランド啓蒙の「道徳哲学」の論理を明らかにすることによって、「自生的な社会秩序」の政治構想を明らかにした。

これを研究するために、再び渡英した。今回は、グラスゴー大学の客員研究員となり、海外での研究環境が大きく整えられることになった。そのため、デイビット・ヒュームの「道徳哲学」についても研究することができた。特に、ヒューム研究において世界的にも著名であるクリストファー・ベリー教授とは度々議論し、その知見を深めてきた。本研究は、海外においても先駆的なものとして認められ、注目をうけた。

4. 研究成果

本研究においては、17 世紀の社会契約論と比較しながら、18 世紀スコットランド啓蒙哲学における「公私」観念の特徴を明らかにし

た。上記の研究を行うために、スコットランドを代表するエディンバラ大学やグラスゴー大学を訪問し、両大学の図書館のスペシャル・コレクションにあった貴重な文献と資料を収集することができた。

また、グラスゴー大学アダム・スミス・リサーチ・ファンデーションの共同代表であったクリストファー・ベリー教授と議論することによって、17 世紀の社会契約論と 18 世紀のスコットランド啓蒙哲学の諸理論との哲学的方法論上の違いについて確認できた。これまでの日本のスミス研究においては、両者を一貫させて理解する傾向が強かったため、大きな成果と言える。また、スコットランド啓蒙の諸理論が、利己的な個人ではなく、「自己」と「他者」を関係づける「社交性」(sociability) に焦点を当てるものであったことを確認できたことも重要な点である。彼らの「道徳哲学」においては、緩やかな「共同体」(community) が想定されていた。

この「共同体」は、封建的なものとは異なり、柔軟な構造を持っているところに特徴がある。ベリー教授は、これを「柔らかな決議論」(soft determinism) と論じている。これは、固定した価値に基づく「厳格な決議論」(hard determinism) にあたるアメリカのコミュニタリアニズムとは区別される。このようにして、スコットランドの道徳哲学は、「共同体」についての新たな理解を与えるものでもあった。

スコットランド啓蒙哲学における論者たちは、そのための独創的な論理を提起していた。フランシス・ハチスンは、普遍的な「慈愛」の徳によって、「排除」や「差別」をしない社会的な包摂性を提起した。ここにおいて、すべての人格を平等なものとして道徳的に尊重することが図られた。ヒュームにおいては、ハチスンにおける普遍的な目的が排除され、世俗における対面的な人間関係に焦点が絞られていく。その結果、他人との「共感」によってしか「正義」がもたらされないことが論じられるようになったのである。さらに、スミスは、「見知らぬ人々」による多様な社会において、それぞれの欲求のバランスをとることを通じて「正義」を実現していくことが主張された。このようにスコットランドの「道徳哲学」の論理を一貫して捉える研究は、そもそも稀有なものであり、社会正義の考察として先駆的なものである。

本研究の成果は、千葉大学「社会・政治思想研究会」と「公共哲学研究会」の双方において発表した。その発表内容は、論文として機関紙『千葉大学 公共研究』(第 7 巻) に掲載されることが予定されている。

また、コミュニティを基盤する公共哲学としての論文「市場と共同体——シティズンシップの政治経済論」が、広井良典・

小林正弥編著『コミュニティ』（勁草書房、2010年）に収録されて出版された。

以上のようにして、本研究は、当初の目的を達成しただけでなく、さらにそれ以上の展開をみせている。本研究は、世界的にも先駆かつ重要なものとして認められ、日本の学術の発展に大きく貢献した。

()

研究者番号：

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 一ノ瀬佳也、市場と共同体——シティズンシップの政治経済論、広井良典・小林正弥編著『コミュニティ』、勁草書房、2010、207-219
- ② 一ノ瀬佳也、研究会コメント「ユートピア主義とコミュニタリアニズム」、千葉大学 公共研究、第5巻第4号、2009、69-73
- ③ 小林正弥・一ノ瀬佳也、平和のための熟議投票の試み——熟議民主主義の実践例、公共研究、第5巻第1号、2008、85-87
- ④ 一ノ瀬佳也、書評論文「善き帝国のビジョン——橋本務『帝国の条件——自由を育む秩序の原理』を読んで」、千葉大学 公共研究、第5巻第1号、2008、195-216。

[その他]

ホームページ等

[http://www.gla.ac.uk/faculties/lbss/asrf/people/visitingfellows/yoshiyaichinos/e/](http://www.gla.ac.uk/faculties/lbss/asrf/people/visitingfellows/yoshiyaichinos/)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

一ノ瀬 佳也 (ICHINOSE YOSHIYA)
千葉大学・大学院人文社会科学研究科・
特任教員
研究者番号：20422272

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者